

おはようございます。ところで、今更なことではありますが、私たちがこうして礼拝に集い、御言葉に聞いているのは何を求めてのことなのでしょう。私たちが主の日の朝にこうして集まり、御言葉に聞いているのは、イエス様が復活された朝を覚えて、イエス様と出会い、イエス様に触れ、イエス様の声、その言葉に聞いていくためです。つまり、共にあるイエス様のことを現実味をもって感じるために、私たちはこうして毎週毎週主の日の礼拝に集うているということです。ですから、そういう意味で、私たちが御言葉の中にいる人々とは同じです。同じように、現実味をもってイエス様の力に与っているのが私たちであるからです。ところが、同じようにイエス様の力に与りながらも、私たちの多くは、彼らと同じところから御言葉に聞いているのでしょうか。彼らと自分とは違う、このところからこの日の御言葉に聞いているように思うのです。それは、私たちの多くは、彼らほど困ってはいないからです。それゆえに、彼らのように切実にイエス様の力にすがりたいとは思ってはいない。従って、もし私たちの多くが今申しましたとおりでであるとすれば、こうして御言葉に聞いている私たちにとって、イエス様の力とは、リアリティを感じさせないもの、現実味の薄いもの、そういうことにもなるのでしょうか。特に、この奇蹟の問題についてはなおのことです。なぜなら、この中の誰一人として、御言葉にあるような奇蹟体験をした者はいないからです。そして、現実味が薄いと感じているのはこの日の御言葉に限ったことではありません。聖書に記されていることの多くが、私たちにとっては、もしかしたらリアリティを感じさせない、いわば、昔話にすぎないものでもあるからです。それゆえ、聖書の御言葉がどこか遠いもの感じてしまう、正直言ってそういうことはないのでしょうか。

そのため、牧師は、御言葉を遠くに感じる人たちに、一生懸命、御言葉を届けようとするのですが、なかなか思うように伝わらないのもまた事実なわけ。それは、一つに私の力不足ということもありましよう。けれども、それだけでは

ないように思います。先ほどから申し上げているように、神の言葉としての御言葉のリアリティ、その現実味を受け取る側が感じていなかったら、どんなに頑張ったところでなかなか伝わるものではないからです。つまり、御言葉は頭の上を通り過ぎるだけのものになってしまっているということです。そして、そうした傾向は最近特に強まってきていると言われていますが、けれども、その反対に、まったく教会と距離のある人にしつかりと御言葉が届いたということもありました。では、それがどのような時かといえますと、葬儀の時です。それは、愛する者との別れを経験した人々にとつて、御言葉がリアリティをもって感じられたからです。そして、その場合の多くは、多くの教会員が参列した、教会の礼拝堂で行った葬儀でのことでもありました。ですから、当然のことではありませんが、私一人の力でそうなったわけではなりません。けれども、このことはまた、そういう力のみなぎっている場所、それが、今、私たちがこうして集められている礼拝堂という場所であるということです。

そこで、皆さんにお尋ねしたいのですが、皆さんは今日礼拝堂に入り、そういう力を感じたのでしょうか。どうでしょう。どうやら、よく分からなかったというのが実のところのようですが、ただ、ご安心ください。それは、意図して、意識的に感じなければならぬものではないからです。なぜなら、私たちの人生が必ずしも自分の意図したようには行かないように、意図したところにすべてを納めようとするところには必ず嘘があるからです。ですから、分からないと思ったその気持ちこそが大事であり、それを誤魔化すところからは、真実が現されることはないからです。ただ、そのままでは、聖書の御言葉は、私たちを支えとはならず、いつまで経っても頭の上を通り過ぎるだけのものとなってしまいます。ですから、そのことを思うと、目の見えないこの二人の人のように、「ダビデの子よ、私たちを憐れんでください」と叫ばずにはいられないのが私たちでもあるのでしょうか。しかし、このような叫び声

を私たちはいつもいつも上げていたいわけではありません。同じような境遇に陥った時、あるいは、万事休す、本当に困った時、そういうときに上げるものがこのような叫びでもあるのでしょうか。ですから、こうした声は年がら年中、四六時中、どこでも上げるわけではありません。そこで、私たちは、この溝をなんとか埋めようとして、また違った意味で奇蹟を求めたりもするのでしょう。ただ、そこで、私たちは考えなければなりません。そもそもこのところで、ここで言われていることが私たちにとって一体どんな意味があるのだろうかということをする。

奇蹟が真実であるかないか、あるいは、一念岩をも通すか通さないか、私たちの関心はついついそうした個人的な事柄へと向かうものです。では、そこから離れて、もっと広い視野に立って、ここでのことを見て行くなら、そこから見えてくるものは何なのでしょう。ただし、その場合の広い視野に立ってということは、空から俯瞰するように外側に立って隅々まで見渡すということではありません。広くということはいエス様の視点に立ってということです。なぜなら、そこに私たちが見たいと思うものがあるからです。それは、どこにしようが、その相手が誰であろうが、時と場所を選ばずに奇蹟を行うことのできるお方が私たちのイエス様でもあるからです。それゆえ、「憐れんでください」と叫ぶこの二人への奇蹟はいエス様にとっては朝飯前のことでもありました。従って、奇蹟を行ったかどうかは二の次のことであって、大事な点は、「憐れんでください」と叫ぶこの二人に向かって、イエス様がその憐れみをもって応えられたということです。

奇蹟は憐れみを現すための手段であって、イエス様が現された憐れみそのものではありません。9:12以下で「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。私が求めるのは憐れみであって、生け贄ではない」とイエス様は仰っているように、もし奇蹟自体がイエス様のなさる憐れみそのものだとするならば、奇蹟自体が憐れみを拘束することとなり、自らが語ったことと明らかに矛盾することにもなるからです。また、それだけではありません。イエス様の憐れみが奇蹟という手段をもって実現するものであるならば、奇蹟を経験したことの無い私たちは、その憐れみの外に置かれているこ

とにもなるからです。従って、この外に置かれているとの気づきは、私たちを返って不自由にします。それは、私たちを御言葉に対して受け身にさせると同時に、御言葉に対する積極性を歪んだものとするからです。つまり、私たちを卑屈にさせるといことですが、ただ、この外に置かれているがゆえの不自由さ、それを日々感じ、苦しんでいたのが、目の不自由な人たちであり、口のきけない人でもありました。そして、この人たちほどではないにせよ、御言葉が私たちの頭の上を通り過ぎるだけで一向に留まることがなく、そして、そのことにも私たちが本当に困っているとしたら、不自由さを感じている点では同じです。

そこで、もう一度御言葉に最初から聞いていきたいのですが、この二人の目の不自由な人は受け身な姿勢でイエス様に叫んではおりません。積極的に「憐れんでください」と訴えているのです。けれども、イエス様はその声にすぐに答えようとはしません。少しの間、距離を取ります。ところが、この二人がイエス様に近づくとやいなや、イエス様はこの二人にこう声をかけたのです。「私にできると信じるのか」と。すると二人は「はい、主よ」とこう答えたのですが、そこで、イエス様が仰ったことは「あなた方の信じているとおりになるように」というこの一言でありました。このことはつまり、イエス様には、その人たちを自分の意のままに操る意図はなかったということです。それは、イエス様が現された憐れみは新たな束縛を生じさせる、そういう不自由なものではないからです。神様に造られた人間としてふさわしく生きて欲しい、これこそがイエス様の願いであり、また、神様の願いでもあるからです。ですから、ここに神様の正しさ、イエス様の正しさが現されているのは間違いありません。

このように、目が開かれたこの二人が見たものは神様とイエス様の正しさでありました。ですから、その喜びの大きさはいかばかりのものであったかと思いませんし、また、この二人は、目が開かれたことによってどれほど慰められたであろうかとも思うのです。そして、この二人がそのような喜びと慰めに与ったのは、イエス様に触れたから、また、イエス様が触れたから、どちらが先でどちらが後なのかはともかく、この互いに触れ合っているという経験こそがこの喜びと慰めをこの二人にもたらすことになったので

す。ですから、先ほど、葬儀の際の私自身の経験をお話ししましたが、愛する者との別れに際し、そのご遺族が主を礼拝する礼拝堂で大きな慰めに与ったのは、まさにここで、この礼拝堂でイエス様に触れる経験をしたからです。つまり、外側からイエス様のことを遠巻きに見ているのではなく、中に入ってきて、イエス様に触れたということです。ですから、この日の御言葉が私たちに明らかにしてくれていることは、奇蹟があったかなかったかということではありません。この二人の目の不自由な人たちも、また、口のきけない人も、そして、こうして御言葉に聞いている私たちも、同じようにイエス様の力の届く中に置かれ、憐れみそのものを受けているということです。従って、イエス様の憐れみは、奇蹟ということ、この特異な出来事を通し現されているということです。

このように、奇蹟はそれを体験した人々が神様の御心の外側ではなく、その内側に置かれていることを現すものであり、従って、この二人の目が開かれた直後、イエス様がこの二人に向かって、「このことは、誰にも知らせてはいけない」と厳しく命じているのは、この内と外とを明らかにするためでもあるのです。ですから、この一言は彼らに安易な発言を戒めているだけではありません。その直後、御言葉が「この二人は外に出ると」と語るように、内と外との違いが分からなければ、つまり、その居場所が内なのか、それとも外なのかを、私たちがそのことをはっきり意識することができなければ、イエス様の憐れみは頭の上を通り過ぎるだけのものになってしまうからです。ただ、このイエス様の厳しさは、先ほどお伝えした「イエス様には私たちのことを束縛する意図はない」ということと大きく矛盾するようにも思えます。けれども、そうではありません。

「この二人は外に出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた」とあるように、厳しく命じているとは言え、イエス様はこの二人をそのままにしておいたわけですから、イエス様にはこの二人を束縛する意図はなかったということです。

こうして、この二人の軽率な行動によって、イエス様のことがその地方一帯に言い広められ、その結果、イエス様の憐れみによって、この二人と同じように一人の人が救われることとなりました。ですから、二人の軽率さが新たな救いをも

たらしたのは間違いありません。けれども、もたらされたものはそれだけではありませんでした。群衆の警戒心とファリサイ派の猜疑心をも呼び起こすことになったのです。それは、すべて、この二人の軽率な行動によるものでもあります。そこでイエス様の噂がこうして一つ一つ積み上がった先に待っていたものがイエス様の十字架でもありました。ですから、イエス様に恩義のあるこの二人にも、その責任の一端があるのは明らかです。ただ、御言葉は、それを皮肉な結果とは見ていません。なぜなら、十字架は神様の憐れみの現れであって、警戒心と猜疑心を抱える人々をも、その救いの内側へと招くものであるからです。従って、二人の軽率な行動の先に私たちが見るものは、イエス様の憐れみであって、それ以外の何ものでもありません。しかし、そのことを私たちが理解するには、この二人の軽率さを御言葉を通してもう一度振り返る必要があるように思うのです。それは、もし私たちが御言葉に対してリアリティを感じず、御言葉が頭の上を通り過ぎるだけだと、そう思っているとすれば、なおのこと、二人のこのお気楽さに目を留める必要があるように思うからです。

礼拝後の私たちのように、外に出ることは私たちに大切な何かを忘れさせるということです。それは、「去る者、日々に疎し」という諺にもありますように、忘れてはならない出来事をも簡単に忘れてしまうのが私たちであるからです。そして、それは、離れることで私たちがリアリティを感じなくなるから、触れているとの現実味を失ってしまうから、そういうことでもあるのでしょうか。ですから、そういう意味で、御言葉が私たちの頭の上を通り過ぎるのは、私たちが御言葉の内側に生きていないからだとも言えるのでしょうか。ならば、そこで私たちはどうすべきなのか。そこで私たちが真っ先に思うことは、内側に生きていることを常に意識しなければならないということです。けれども、その強制がイエス様の意図であり、また、御言葉がこうして私たちに何かを語るその目的であるとしたら、そこに私たちは本当にイエス様の憐れみを感じることができのでしょうか。その時の私たちにとって、御言葉は、そもそもリアリティを失った言葉でもあるのです。では、その言葉によって、私たちが本当に変えられるのでしょうか。今日の箇所を見るならば、イエス

様の言葉は外に出たこの二人には届かなかったわけです。つまり、イエス様のお気持ちは、結局はこの二人には通じなかったということです。その結果、天に宝を積むことにもなったのですが、けれども、その一方では問題が余計に複雑になっていくことにもなったわけです。しかも、そのすべてがイエス様の肩にのしかかっていくことにもなった。そして、このイエス様の肩に乗ったものが私たち人間の罪であり、それを形として示したものが十字架の出来事でもありました。けれども、このイエス様の姿の中に現されているものがイエス様と神様の憐れみそのものでもあるのです。ですから、そう考えるなら、イエス様が私たちに対して何かをすということ、つまり、その憐れみを現すということはこう考えることができると思います。それは、私たちの様々な罪の問題に巻き込まれ、もみくちやにされているイエス様の姿です。

「このことは誰にも知らせてはいけない」とイエス様が仰るように、イエス様の言葉は私たちの考え方をある意味で束縛するものです。つまり、こうしなければならぬ、こうあらねばと、そう私たちに思わせるものがイエス様の言葉でもあるのです。けれども、そのイエス様は、外に出て行ったこの二人の行動を無理矢理止めようとはしていません。そのため、イエス様はもみくちやにされていくことにもなったのですが、それは、意に反してそうだったということではありません。もみくちやにされることは意図してのことではありますが、けれども、イエス様は自らが語ったその言葉の通りに私たちを無理矢理従わせようとはなさらないのです。ただ共にいるだけなのです。もみくちやになりながらも、ただ共にいようとする、それが私たちのイエス様であるということです。そして、それは、私たちが自分以外の誰かと共にいることでしか生きることができないからです。そして、そこにまた私たちの苦しみの理由があるのです。ですから、このイエス様が共にいることを私たちがさらに深く知るためには、ここで「黙っているように」とイエス様が仰るように、イエス様との関わりを沈黙の内に絶えず心に留める必要があるのでしょうか。けれども、この二人は黙ってはいなかった、外に出て行って、自分がどれだけ大きなものをいただいたかを吹聴して回ったのです。けれども、ここが大事な点です。イ

エス様との関わりを外に出て行った者とも、イエス様は、離れることなく共にいてくださっているのです。そして、そのことをはっきりと示されたのがイエス様の弟子たちでありました。ただ、この内と外とがはっきりと分かるまでには、とても時間のかかることでもありました。

御言葉は、ある意味で私たちの頭の上を通り過ぎるだけのものなのかもしれませぬ。それだけにまた、イエス様が共にあるということもなかなか分かりにくく、それが分かるまではかなりの時間を要するものでもあるのでしょうか。分かったと思っても、その途端に遠ざかっていくのを感じることもあるからです。しかし、そうであっても、御言葉は空しく神様のところに帰って行くことはありません。なぜなら、その私たちと共にあるのがイエス様であり、そのイエス様が言葉によって私たちのことを束縛することなく、導いてくださっているからです。だからこそ、私たちはその言葉によって生かされ、新たにされることになるのです。それは、私たちがイエス様の憐れみの外に置かれることはないからです。まただから、イエス様は私たちに人と共にいることを求めるのです。巻き込まれ、もみくちやにされながらも、そこに現されたものがイエス様の憐れみであり、愛であるように、私たちはこの大切なことを今こうして置かれているこの場所で知らされてもいるからです。

イエス様の憐れみもその愛も、予定調和の中でだけに約束されているものではありません。先の見通しの立たないその中であってなお、約束されているものなのです。まただから、御言葉は「得くるより与えるが幸いななり」と私たちに語るのですが、それは、もみくちやにされながらも、なお、どこまでもいつまでも、イエス様は私たちと共にいてくださっているからです。ですから、イエス様の憐れみの中に生きていと私たちが信じるから、私たちにはその先にある希望は必ず知らされることになるのです。それがイエス様を信じる私たちであることをもう一度心に留め、新しい一週間を歩む私たちでありたいと思います。祈りましょ